

# 保育者養成校における音楽系科目のシラバス充実のための一考察 —日本保育学会第61回大会を俯瞰して—

伏 見 強

本学児童教育学科のカリキュラム及びシラバスの改善・改良の課題は何か。筆者が関わる音楽系科目のシラバス充実と教育的効果の向上を図るための基礎資料を得るために、日本保育学会第61回大会を振り返りながら本考察を行う。保育者養成は多岐にわたる領域から成り、多面的で複合的な専門性を包含しているが、関係各機関においても、様々な角度から実効性の高い養成プログラムの開発が試行されていた。これらのデータと本学及び本学音楽系科目の課題を対比・検証する。

キーワード：保育者養成、カリキュラム、シラバス改善、幼児音楽、保育内容（表現）

## 1. はじめに

「保育士は、制度的には、資格を取得した時点で、専門家としていちおう完成した専門家とみなされる。」<sup>(1)</sup> そのこともあって幼稚園教諭を含む保育者は、高校生、特に女子の憧れの職業の一つに挙げられている。事実、幼稚園や保育所などでは、免許・資格を取得したばかりの新卒者を即戦力として採用する場合が多く、その期待は大きい。しかしながら、免許・資格に相応しい知見と技能の修得は容易ならざるものがあり、他の職種と同様に一人前の保育者になるには相応の現場経験が必要になる。養成課程の修了が即、完成された専門家とはなり得ず、従って、現場から厳しい声が聞こえてくことも皆無ではない。

本年度、第14回目を数える就職懇談会について主幹の就職部は、「保育園を含む福祉の現場では常に人材不足が続き、また、幼稚園では保育園志望増加のため応募者が少なく、双方とも人材確保に向けて養成校への期待が大きいこと

が感じられた。数年前までは即戦力となる人物を求められていたが、今は、就職後に各園に合うように育てれば良いと考えられている園が多くなってきた。ただし、学生時代に基本的な生活習慣やマナーを身につけ、社会人として気持ちを切り替えて就職に望むことを求められている。」と報告する。

少子化の影響を受けて、大学は全入時代を迎えたと言われる。現代社会の変容とともに、大学を取り巻く環境も大きく変化してきた。そこで学ぶ学生の多様化傾向は益々強まり、学力の低下に加えて、生活体験の不足も気になるところであるが、反面、幼児教育を目指す昨今の学生は、おしなべて独創性やひらめきに優れていて、感嘆させられることも記憶に留めたい。

現場では、幼児の養育を主とする対人援助職としての幅広い教養と高度な技能が求められる。当然のことながら、養成校ではこれら社会の負託に応えるために、多岐にわたるカリキュラムに工夫を凝らすこととなる。短期大学での保育士養成は、高等教育としての教養教育と、免許・資格に見合った職業専門教育の両方から

なり、修業年限2年という短い期間に、完成された人間教育と専門家を養成するという二つの使命を負っている。本学では、以前から、限られた期間での合理的な保育者養成システムを求めて、カリキュラム全体を総合的に検証してきており、効果的なシラバスを求めて毎年工夫を重ねてきたところである。今後はシークエンスの再構築やチーム・ティーチングを視野に入れた教員間の連携も必要となろう。

筆者が関わる音楽系科目のシラバスにおいてもこの流れの中で改善を加えてきているが、一層の充実を図るための基礎資料を得るために本考察を行った。

以下、現状と課題、日本保育学会第61回大会概要、研究方法、結果、考察、おわりに、の順に述べる。

## 1. 現状と課題

保育者養成に関わる短期大学のカリキュラム<sup>②</sup>は、高等教育としての教養教育を目差す総合教養科目と、免許・資格に見合った職業専門教育を担う専門科目からなる。後者は教科に関する科目と教職に関する科目の二つの科目群から構成され、その内の多くは教育職員免許法、及び児童福祉法に対応する科目が占る<sup>③</sup>。これらを遺漏なく実施するだけでも容易ならざるものがあるが、本学では更に特色ある選択科目を設けるなど、豊かな内容のカリキュラムを実施してきたことから、学生はその分だけタイトで負担が大きいとも言えよう。

本学のシラバスは、毎年のように改善が試みられ、昨年度も新書式に改められた。複数教員が担当する科目では内容が統一されつつある。しかし、音楽系科目のようにシラバスが統一されても、担当教員間で教育内容や教育方法にバ

ラツキが見られる場合もあり、改善の余地は残されている。

本学では原則として、演習系の全てをクラス制とし、講義系は合併クラスで実施される場合が多く、ピアノ実技はグループ別個人レッスンを採用している。このほか、卒業必修の保育ゼミは、学生の希望を優先しており、数名～20数名と幅広い。選択科目では、授業担当者が制限する場合を除いて学生の希望が尊重されている。

平成19年度よりGPAを導入し、履修全科目において学生の学習評価を厳格に実施したところであるが、公平な評価のためにも、教育内容のもとより授業形態や、試験内容とその実施方法などが教員間で不揃いであってはならない。

全国的な養成校の悩みとして、いわゆる15回の授業確保の問題があり、本学の2回生前期を例にとると、6月期に行われる2週間（授業日5日×2）の後期幼稚園実習の補講のために、土曜日を中心として祝日も含めた10日間が充てられる。このことは結果的に、ボランティア活動やクラブ活動に大きく影響することも考えられ、学生の自発的な活動の制限にも繋がりがねない。自主的且つ奉仕的精神は、保育者の基盤をなす最も基本的で大切な能力と思われるが、それらを涵養する態勢が取りにくい現状がある。

学生の負担を考慮するなら、「通年」・「半期」科目といった時間的な分量の問題にも立ち入らなければならないが、これらは授業・学習効果の本質に関わるものであるから、改善にあたっては様々な角度から慎重に検討する必要がある。

### 3. 日本保育学会第61回大会概要

日本保育学会第61回大会発表論文集2008<sup>(4)</sup>より大会を概観する。本大会では、2008年5月17日午前の部の名古屋市立公会堂での、京都大学霊長類研究所行動神経研究部門教授・正高信男による記念講演「人はなぜ子育てに悩むのか」を皮切りに、午後から名古屋市立大学山の畑キャンパスに会場を移して、翌18日までの2日間にわたり、国際シンポジウム「大韓民国の標準保育課程と2007年改訂幼稚園教育課程—作成過程での理論的実践的検討内容と課題—」、課題研究委員会企画シンポジウム「乳幼児の権利と保育—子どもの声をどう読みとるか—」、準備委員会企画シンポジウム「改定幼稚園教育要領と改定保育所保育指針—保育内容・方法の質の向上の視点から—」、「幼稚園・保育所と小学校連携の課題を巡る」、「『協同的な学び』とは何か—幼児教育におけるプロジェクト活動の可能性を考える—」、「特別支援教育の始まりと就学前支援」、「『幼保一体化』の現状と課題—子ども・保護者・保育者の視点から検討する—」の、合計7テーマによる企画シンポジウムが開催された。

また、「幼稚園教育要領の改訂について」と「新保育所保育指針の内容とその特徴」の2テーマによる特別講座も開催された。さらに、研究倫理問題特別ワークショップ「科学上の『ミスコンダクト』の防止と対応—フロネシスの育成について—」、子どもの遊びワークショップ「子どもの遊び文化ワークショップ—子どもの文化に触れて、遊んで、楽しむ世界—」の2テーマによる準備委員会特別企画ワークショップも開催された。加えて、会員主催による20題目の自主シンポジウムもあり、盛りだくさんな討議が

各所で見られた。

さらに、研究発表は、口頭発表が497件、ポスター発表が191件、ビデオ実践研究発表が5件、合計693題目の発表があった。

### 4. 研究方法

日本保育学会第61回大会の研究発表<sup>(5)</sup>を俯瞰し、全国の養成校教員がどのような研究・教育テーマを課題としているのかを検証する。同学会が分類している発表区分に従って整理し、次に「音楽」「音楽表現」「音楽教育」などをキーワードに、音楽を研究内容とする題目を抽出した。保育内容「表現」はいわゆる造形系、身体表現系、そして音楽系からなるが、ここでは音楽系のみを対象とする。「身体のリズム」、「生活リズム」、「詩の唱和」、「リトミック」、「表現力」等音楽との関連をイメージさせるキーワードを含む場合は発表抄録により確認、取捨選択した。

発表区分別発表件数と音楽表現・音楽教育に関する演題をそれぞれ拾い上げ、双方の関連を表1にまとめ、表1から図1及び図2を導く。表1並びに図1、図2を対照しながら、これらから見えてくる保育者養成校の課題を整理する。

その上で、本学のカリキュラム、取りわけ基礎技能としての音楽及び表現系の音楽に関して、その指導法も含めたシラバスの課題について言及したい。

表2は、表1に準じてまとめたものであるが、ここでは参考資料に留める。従って、図1・2には反映されない。

なお、表1に記した発表件数は口頭発表とポスター発表の合計で、( )内はポスター発表数を示す。さらに、発表番号欄のPはポスター発表を表し、表2のVはビデオ発表に、Jは自主

表1 日本保育学会 第61回大会 口頭発表及びポスター発表での音・音楽関連発表題目（発表区分別）

発表区分	発表件数	音・音楽関連発表題目	発表番号
①保育思想・保育原理・保育史	25 (1)		
②保育制度・行財政	13 (3)		
③発達論・心身の発達	30 (12)	・米国の文化的背景と幼児の異文化適応のための音楽療法の役割（その1）—幼児への音楽療法によるコミュニケーションの変容から捉えた発達支援の可能性— ・幼児のリズム認知に関する研究	161 P013
④教育計画・保育計画・指導計画・評価	13 (1)		
⑤保育内容Ⅰ（保育内容総論・遊び）	28 (7)	・親子のきずなを深める遊び歌2—子どもに受け入れられるわけ—	021
⑥保育内容Ⅱ（健康・人間関係・環境・言葉・表現）	66 (19)	・遊びにみられる音楽的なコミュニケーションの意味	024
		・わらべうたに対する保育者の教育目標、取り入れる動機、及び学習ストラテジーに関する韓国と日本の比較研究	025
		・STOMP 導入の音楽表現授業(2)	030
		・保育教材としての手遊び歌の現状と課題	032
		・保育における音楽教育についての一考察(1)—音楽家からみた新たな視点—	168
		・保育における音楽教育についての一考察(2)—新たな視点からの環境づくりを考える—	169
		・保育者と幼児がともに「うたう」ことに関する考察 その5—生成する幼児の「ことば」と「うた」、そしてともに「うたう」こと—	170
		・幼児の内面理解を深める「わらべうた」の研究	171
		・療法的音楽表現活動	172
		・幼児の音楽的能力の育成(1)—遊び歌をととして—	178
		・子どもの創造的音楽表現に与える保育者の影響	179
		・幼児の音を介した表現とその変容—音の聴き方に着目して—	314
		・幼児期における芸術表現教育プログラム開発の試み—保育施設でのワークショップ実践を通して—	315
		・みんなで歌う場面での表現する楽しさのある環境づくり	319
		・保育者の音楽的感受性が幼児の音楽表現に及ぼす影響	320
		・幼児教育実践における音楽表現の在り方に関する一考察 その4—音を楽しむ表現遊び：絵本の世界から その2—	434
		・オペレッタ創作活動による表現力の育成と保育への応用Ⅳ—作品の創作及び発表に対する自己評価—	435
		・オペレッタ創作活動による表現力の育成と保育への応用Ⅴ—作品の創作及び発表に対する自己他者評価—	436
		・幼児の音楽表現の指導(5)—学びの体験—	440
		・3歳児の歌唱行動とその曲目—T 町有線放送『我が家の主役たち』（3歳児の誕生日のインタビュー）20年の記録より—	441
⑦保育方法（保育方法論・保育形態・幼児理解）	36 (8)	・保育者の音楽表現のとらえかた(5)—幼稚園教員と小学校教員の意識比較—	P034
		・音楽活動—保育につなぐ器楽合奏—	P035
		・幼児向けの歌の歌詞における数学的要素について	P043
		・幼児の音楽的遊びにおける周辺参加の事例研究—ピアノ遊びを中心に—	037
		・保育所における園庭マラソンの音楽効果に関する研究—親子間のコミュニケーション促進に向けた指導方法を目指して—	038
		・就学前教育における規律化のための音楽—一曲の種類と音楽使用の効果について—	180

⑧保育環境・保育教材・食育	47 (17)		
⑨乳児保育	28 (4)	・乳幼児とその養育者によるわらべうた遊びの考察—子育て支援における実践報告より— ・乳幼児の音楽表現5—0歳児(7ヶ月から1歳未満児)の音楽表現と保育者のかかわり—	453 456
⑩障害児保育	59 (23)	・わらべうたと障害児保育—「輪の隊形」での遊びに関する考察— ・音楽療育の試み—集団での活動—	206 P089
⑪児童文化・児童文化財	18 (3)		
⑫保育者の資質能力・専門性	52 (11)	・保育者に求められる音楽的な資質に関する研究—幼児の音楽活動のビジュアルエスノグラフィーを用いた半構造化インタビューより—	086
⑬保育専門職の養成	120(43)	・実習に先立つ音楽指導に活かすために—ピアノ伴奏のテンポの変動についての考察— ・保育者養成校におけるピアノ指導研究 その2—即習『左手1本・右手2本奏法』— ・保育者養成におけるリトミック教育の導入 ・保育者養成におけるソルフェージュ力の育成(1)—初見視唱・アンケート調査を通して— ・保育者養成における音楽指導について—教育実習における弾き歌い課題の調査から(Ⅱ)— ・保育者養成大学のピアノ指導に関する研究(Ⅱ)—ピアノ経験と進路志望に着目して— ・保育者のリズム感と拍節感の育成に関する研究 ・「音痴」克服指導における補助的サポートに関する研究Ⅱ—継続的なグループ指導の分析を通して— ・学生の音楽意識—短期大学部と四年制大学との比較から—	106 234 240 243 374 P134 P149 P151 P152
⑭家庭教育・子育て支援	97 (29)	・あやし唄の子育て家庭支援への導入と効果—初期の親子関係形成について— ・保育者養成校音楽教員のあり方に関する一考察—子育て支援の場とのかかわりから— ・音体操が育てる社会性—「王子の狐〜ねがいの石」市民ミュージカルの実践— ・子育て支援講座における「親子で楽しむリズム遊び」の役割	398 P162 P178 P181
⑮幼保一体化・幼保小連携	19 (4)	・保育における音楽表現と小学校音楽の連携 ・領域「表現」から教科「音楽」へ ・子どもの姿からなめらかな接続を考える—領域「表現」から教科「音楽」へ—	129 130 131
⑯児童福祉・児童の人権	8 (1)		
⑰多文化教育・異文化理解	29 (5)	・ハンガリーの幼稚園における音楽教育(2)—教材選択の視点から—	138

表2 日本保育学会 第61回大会 ビデオ発表及び自主シンポジウムでの音・音楽関連題目

	発表件数	音・音楽関連発表題目	発表番号
ビデオ実践研究発表	5	乳幼児の発達を促す「アクアミクス」	V005
自主シンポジウム	20	保育者養成において学生に「表現」をどのように指導するか(4)—なぜ、なんのために、どう歌うのか—	J006

シンポジウムに、それぞれ付された記号である。

## 5. 結 果

結果を次の1)～10)にまとめ、本学のカリキュラム及び関連科目のシラバスについては11)で述べる。

1) 日本保育学会第61回大会における全693題目を、実施要項に従って17項目の発表区分で整理し、音楽表現・音楽教育などの音楽系テーマをピックアップする形でまとめたのが表1である。加えて、図1は表1の発表区分別発表件数を、図2は音楽系発表件数をそれぞれグラフにした。

2) 表1に見るとおり、日本保育学会では保育者に求められる知識や技能を、①保育思想・保育原理・保育史〈以下「保育原理等」〉、②保育制度・行財政〈以下「保育制度等」〉、③発達論・心身の発達〈以下「発達論等」〉、④教育計画・保育計画・指導計画・評価〈以下「保育計

画等」〉、⑤保育内容Ⅰ（保育内容総論・遊び）〈以下「保育内容Ⅰ」〉、⑥保育内容Ⅱ（健康・人間関係・環境・言葉・表現）〈以下「保育内容Ⅱ」〉、⑦保育方法（保育方法論・保育形態・幼児理解）〈以下「保育方法」〉、⑧保育環境・保育教材・食育〈以下「保育環境等」〉、⑨乳児保育〈以下「乳児保育」〉、⑩障害児保育〈以下「障害児保育」〉、⑪児童文化・児童文化財〈以下「児童文化等」〉、⑫保育者の資質能力・専門性〈以下「保育者の資質能力等」〉、⑬保育専門職の養成〈以下「保育専門職の養成」〉、⑭家庭教育・子育て支援〈以下「子育て支援等」〉、⑮幼保一体化・幼保小連携〈以下「幼保一体化等」〉、⑯児童福祉・児童の人権〈以下「児童福祉等」〉、⑰多文化教育・異文化理解〈以下「多文化教育等」〉、の17項目の発表区分を設け、保育者の専門性を網羅している。

3) 図1の示すとおり、発表数の多い順に並べると「保育専門職の養成」が120件で最も多く17%強を占め、97件の「子育て支援等」、66

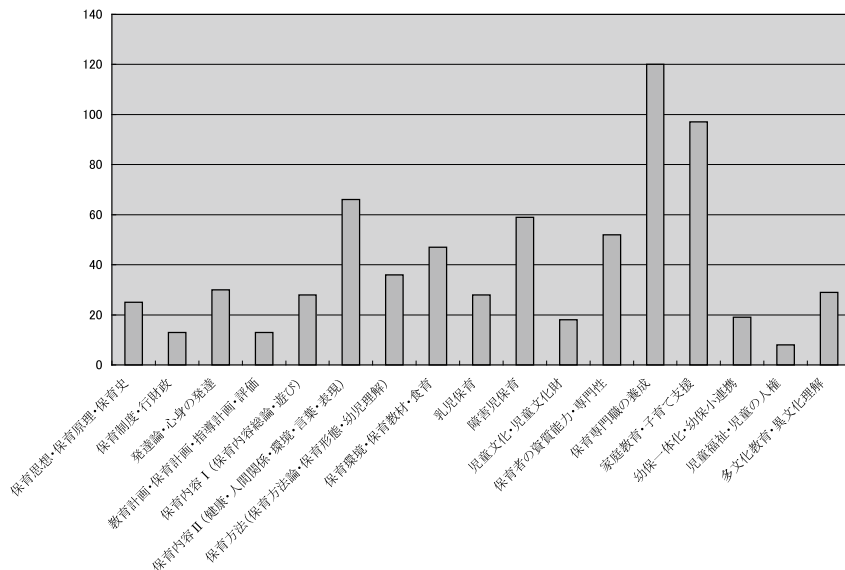


図1 区分別発表件数

件の「保育内容Ⅱ」、59件の「障害児保育」、52件の「保育者の資質能力等」、47件の「保育環境等」、36件の「保育方法」、30件の「発達論等」と続く。一方、発表件数の少ない順にみると、「児童福祉等」が最も少なく8件に留まり、「保育制度等」、「保育計画等」が各13件、「児童文化等」が18件、「幼保一体化等」が19件と続く。そして、残りは20件台で多い順に並べると、「多文化教育等」、次に同数で「保育内容Ⅰ」、「乳児保育」が続き、「保育原理等」となった。

4) 発表区分別音・音楽関連の発表件数を図2に示したが、「保育内容Ⅱ」が23件で最も多く、2番目に9件の「保育専門職の養成」、4件の「子育て支援等」が続く。残りは、「保育方法」と「幼保一体化等」が各3件、「発達論等」、「乳児保育」、「障害児保育」が各2件、「保育内容Ⅰ」、「保育者の資質能力等」、「多文化教育等」が各1件ずつで、これらの区分以外での発表はなかった。

5) 音楽表現や音楽教育に関する発表を詳細に観ると、最も多くの発表があった「保育内

容Ⅱ」では、わらべうた、手遊び、遊び歌などを用いた幼児の音楽的能力の育成や音楽教育などの実践研究が目につき、保育者の音楽的感受性が音楽表現に影響するという視点の発表もあった。オペレッタや絵本の活用も散見され、ことばと結びつけた発表もあるなど多彩である。

6) 一方、2番目に多くの発表があった「保育専門職の養成」ではピアノ奏法の指導法に絞られる。その上で、ソルフェージュやリトミックに言及しているものもある中で、音痴克服指導の研究はいささか異色。ここでは、表現の基礎技能としての捉え方が一般的で、現場で求められるピアノによる音楽表現指導がスムーズに行える演奏力の養成を課題としている場合が多い。

7) 次の「子育て支援等」では、子育て支援の導入やかかわり方の一つとして取り上げられていた。

8) 4番目の「保育方法」では、音楽遊び参

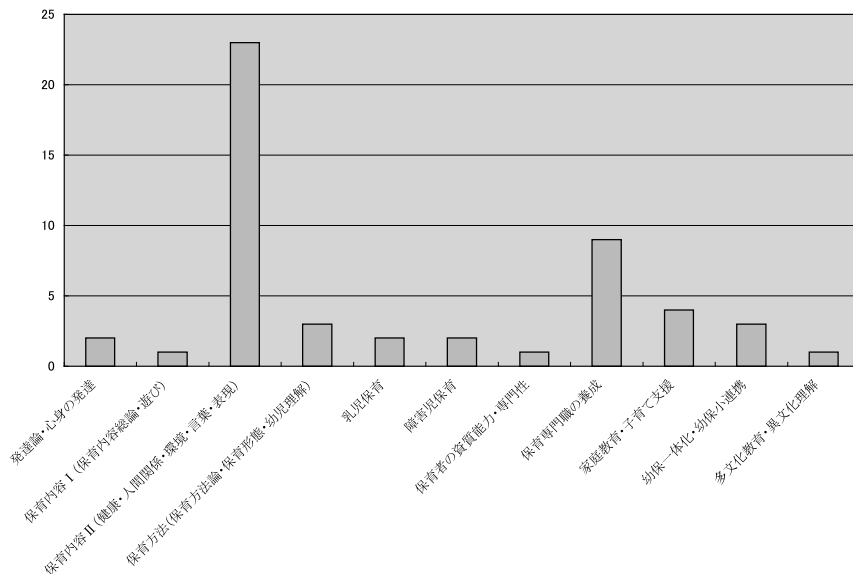


図2 区分別音・音楽関連発表件数

加のためや園庭マラソンに音楽を用いること、音楽を用いた規律化など、音楽の効用を報告している。同順位の「幼保一体化等」では、領域「表現」から教科「音楽」へのスムーズな移行のための試行がなされている。

9) 5番目の「発達論等」では音楽療法的視点から、「乳児保育」、「障害児保育」ではわらべうたなどを通した保育者の音楽表現のかかわりが、それぞれ発表された。

10) 「保育内容Ⅰ」では、親子の絆を深める視点から「保育者の資質能力等」を考察し、「多文化教育等」では、教材選択の視点から、各1件ずつの発表があった。

11) 当然のことながら、本学のカリキュラムは、保育者養成に関わる全ての領域において必要な科目と内容を備えており、その基準を十分に満たしていることは言うまでもない。逆に、現場で役立つ応用力と実践力のある保育者養成を目差すがあまり、欲張りすぎの嫌いも指摘されよう。今大会で発表された研究内容と本学の音楽系科目のシラバス<sup>6)</sup>とを比較・対照してみても、音楽の基礎技能と音楽表現の両面にわたって、その指導法も含め遜色のない内容であることを確認した。

## 6. 考 察

結果で述べた1)～11)に対応させて考察を行い、学会発表件数等から推察される保育者養成校の課題について12)で言及する。

1) 本学会の研究発表は、申込期限の8ヶ月前と、4ヶ月前の発表原稿提出期限の両方を厳守すれば受け付けられる。前述のとおり、第61回大会も口頭発表、ポスター発表、ビデオ実践研究発表を合計すると693題目と多数の発表があったが、会員は研究者、教育者、保育に携わ

る現場教職員と幅広く、発表もまた多種多様である。発表内容やレベル、題目の適切さも様々であるものの、保育は学際的領域の上に成り立つものであるから、ここでは敢えて個々の発表に対するコメントは差し控え、発表件数などのデータのみを検討した。それでも漠然とはあるものの保育者養成校の今日的課題が浮上する。

2) 幼稚園教諭は文部科学省「教育職員免許法」、保育士は厚生労働省「指定保育士養成施設指定基準に基づき、カリキュラムがそれぞれ定められており、多岐にわたる保育者の知識や技能を教科目として規定しているが、表1に見るとおり、日本保育学会では保育者に求められるこれらの幅広い知識や技能ついて、17の区分に従って発表論文を分類している。投稿者が発表区分を選び応募するシステムになっており、ミスマッチも危惧される一方で、発表者の教育的スタンスが暗示されているとも観て取れよう。

3) 発表数の多い順から、「保育専門職の養成」、「子育て支援等」、「保育内容Ⅱ」、「障害児保育」、「保育者の資質能力等」、「保育環境等」、「保育方法」、「発達論等」と続くが、会員の関心の高さや取り組む研究者数の多少の順と観ることができる。取りわけ、「保育専門職の養成」は、古くて新しい課題であるし、「子育て支援等」は今日的な課題として全国的に注目されていることがうかがえる。

一方、発表件数の少なかった順に、「児童福祉等」、「保育制度等」、「保育計画等」、「児童文化等」、「幼保一体化等」と続くが、中間的な発表件数の「多文化教育等」、「保育内容Ⅰ」、「乳児保育」、「保育原理等」を含め、これらはおしなべて内容が確立された領域と、新たな課題で未開拓なものが混在しているように見える。



4) 図2では、音楽関連の発表から、多くの音楽教員が「保育内容Ⅱ」の「表現」としての位置づけで音楽を取り扱っていることが分かる。次いで、「保育専門職の養成」では、ピアノ奏法技術の習得が大きな位置づけであることをうかがわせる。「子育て支援等」における音楽に関する発表は、少々意外な印象も無いではない。「保育方法」、「幼保一体化等」、「発達論等」、「乳児保育」、「障害児保育」、「保育内容Ⅰ」、「保育者の資質能力等」、「多文化教育等」と、音楽を様々な異なる視点から捉え、保育者の音楽的観点の拡大を図っているように感じられ、共感する部分も多い。

5) 最も多くの発表があった「保育内容Ⅱ」では、わらべうた、手遊び、遊び歌などを用いた幼児の音楽的能力の育成や音楽教育などが目を惹いたが、幼児音楽では子どもの遊びと音楽の観点が重要となる。保育者の音楽的感受性が音楽表現に影響するという視点の発表も面白いと思われる反面、音楽を強調し過ぎることは慎みたい。オペレッタや絵本の活用も散見され、ことばと結びつけた発表もあるなど多種多様であるが、保育者の資質としての表現が、エンターテインメントと混同されないように注意しなければならない。

6) 一方、「保育専門職の養成」では、ピアノ奏法に関するテクニックの獲得に絞られるが、ここでも、採用試験対応などから音楽の楽しみよりも技術的トレーニングにウエイトがおかれることがしばしばあることにも注意を払う必要があろう。ピアノは弾けるようになると面白いが、その面白さを実感するまでに地味な反復練習が不可欠である。初歩の学習者にとって技術獲得のプロセスは苦労の連続のように感じられることが多く、ここでは、それをも克服させるようなメソッドの開発が待たれる。そのた

めの試行としてソルフージュやリトミック、音痴の克服など、様々な試みがなされているのであれば、共感をもって見守りたい。

7) 8)「子育て支援等」の導入のほか、子どものかかわり方の一つとしての発表や音楽遊び参加のための音楽、園庭マラソンに音楽を用いること、さらには音楽を用いた規律化など、音楽の効用の報告など、試みとしては面白い。領域「表現」から教科「音楽」へのスムーズな移行のための試行も、幼児教育における音楽指導の重要な視点の一つになろう。

9)「発達論等」では、音楽療法的視点から発表されているが、療育的音楽療法の研究も進んできており、発表の意義は認めるものの、保育者に求められる標準的な音楽的知見と技術からは少し距離があるように思われた。

また、保育において、わらべうたは格好の教材として取り上げられるが、「わらべうたは、遊びを伴った歌であるから、ただ歌だけが伝搬、伝承されることはむしろ例外である。お手合わせにしろ、ジャンケンにしろ、むしろ遊びそのものが伝搬し、歌はそれに付属品としてついて廻るのである。」<sup>10)</sup>という一面も理解しておきたい。

10)「保育内容Ⅰ」での発表は、「保育者の資質能力等」の範疇に入れることができるのかも知れない。「多文化教育等」の発表区分は、今後の発展の可能性に期待したい。

11) 本学のカリキュラム上の課題は、多数に上る選択科目の精査と開講期間を含む合理的なシークエンスの確立にありそうだ。教科目及び授業内容の充実は今後も継続して模索されなければならないが、タイト過ぎる学生の状況から、学習の効果が憂慮される。

近年、音楽系科目でもシラバスが統一された。今後は、教員間で教育内容や教育方法の研究を

進め、学校組織としての授業改善に向けた取り組みが引き続き必要となる。

12) 学会発表件数等から保育者養成校の課題を考えてきたが、結果をどう読みとるか。発表件数は全国の研究者や養成校教員、保育現場関係者の取組の多少を表しているが、それは即、関心の高低に繋がるのだろうか。発表件数が少ない領域について観てみると、完成の域に達しつつある場合と、発展途上の二通りが考えられよう。

音楽系の発表を観ると、同一領域であっても教員個々のバックボーンとなる専門性の相違から、教育内容にも大きな差が生じている場合が多い。各教員の教育観に基づいて、それぞれの担当科目のシラバスを構築する訳であるから、厚労省や文部科学省のガイドラインによって規定されている科目であっても、実際のシラバスや教育内容が異なっているのも当然のことであろう。保育者養成に関わる教員の多くは、関連領域のスペシャリストによって構成され、保育の専門家は意外に少ない。このような背景もあって、全国的にみても統一的且つ確立的内容には至っていない。

特に、保育内容表現での発表は様々な内容を包含していた。保育内容は、もともと造形系、音楽系、身体表現系の幅広い領域から成り、その指導内容や指導方法が多岐にわたることから上記の傾向が強い。

## 7. おわりに

本学児童教育学科の授業実施態勢は如何にあるべきか。本論では、カリキュラムやシラバスなどから授業内容の現状と課題を考え、特に筆者が関わる音楽系科目の一層の充実を図るための基礎資料を得るために、日本保育学会第61回

大会を俯瞰し、同大会発表論文集から保育者養成の研究課題を探った。

本学科で実施されている授業科目は、保育者養成にとってどれも必要不可欠なものばかりであるが、過密過ぎる学習内容は消化不良が危惧されるほか、ボランティア活動やクラブ活動といった自主的で自立的な学びの妨げになる可能性も憂慮される。また、GPAの前提として進めてきたシラバスの統一も、授業内容を揃え、評価を一致させるところまでには至っていない現状もあった。

一方、新たに誕生した科目「子育て支援」、「子育て支援活動」などは、今日的で全国的な課題であり、更に発展させる可能性があるし、20年度に再スタートした「保育ゼミ」の充実も期待される。

日本保育学会でも17の発表区分を設けるほど、幼児教育の領域は多岐にわたる。ここでは深く立ち入らなかったが、全国の保育者養成校では、音楽系以外の他領域においても様々な取組が試行されていた。

保育者養成校で学ぶ学生は、確立されたメソッドに基づいて授業が構築され実施されているものと確信している。教員もまた各自の経験からそれに近い認識で教授している場合が多いものと推察されるが、だからこそ惰性を排除し未整備な部分と向き合って、絶えずより良いシラバスとそれを前提にしたカリキュラムの構築を図らなければならない。社会が求める質の高い保育者養成のためには、全学的な視点に立った教育内容の継続的な見直しが不可欠である。

## 参考文献・引用文献

- (1) 社団法人全国保育士養成協議会専門委員：保育士養成資料集第48号，社団法人全国保育士養成協議会，東京，P1，2008

- (2) 京都文教短期大学：講義概要（シラバス），P142～147, 184～189, 2008
- (3) 京都文教短期大学：COLLEGE LIFE, P43, 2008
- (4) 日本保育学会第61回大会準備委員会：同大会発表論文集，同大会準備委員会事務局，名古屋，P18～110, 2008
- (5) 日本保育学会第61回大会準備委員会：同大会発表論文集，同大会準備委員会事務局，名古屋，P46～110, 2008
- (6) 京都文教短期大学：講義概要（シラバス），P151～153, 193～195, 2008
- (7) 小泉文夫：音楽の根源にあるもの，平凡社，東京，P102, 1999